

「あの夏 60年目の恋文」を

おぐれの恋想の前・後田譚

浅 田 高 明

恋文と言つても別に私のものではない。以前、つまり平成十六年九月十六日(土)夜九時から十時十分までNHKテレビ番組で放映されたドキュメンタリー・ドラマの中で、かつてN女子高等師範学校の教生だった園師の女性に宛てて、その付属国民学校の児童だった一男性が書いた懐旧、敬慕の手紙のことである。多分、このドラマは見られた方もかなりおられ、ああ、あれかとお気付きの向きもきっと多いのではないか? とは思つが、一応、そのあたりを述べておこう。

君が機影ひたとわが上にさしたれば
息もつまりてたちつくしたり S・K

この女性歌人S・K氏(?)は、遙か五十九年前の夏すなわち昭和十九年六月末から戦時下による半年繰上げ卒業の九月まで、H・I氏の通つた国民学校四年男子組(略称・ヨンダン)に教育実習生として配属され、卒業後間もなく航空隊勤務のK海軍士官と結婚されたS・Y先生だったのである。遠い少年の日、その輝く知性と美貌に憧れて、幼い胸をときめかせたあの教生のY先生、テレビ画像とは言えはからずもその紛れもない彼女の姿にまみえたI氏は、字幕にあつたH市を頼りに今は歌人であり児童文学作家、かつエッセイズ

番組「私の太平洋戦争、昭和万葉集から」の録画DVDを再生、視聴していた。

本番組は昭和五十四年八月に放映された「戦争を伝える」シリーズ、NHKアーカイブ・フィルムの一つである。

番組の半ば過ぎ、女性ナレーター・奈良岡朋子が詠み挙げる一首の短歌とともにその詠み手の名前と姿が映し出された瞬間、彼の田は思わずテレビ画面に釘付けになり、心臓が高鳴った。

トとして名を成しておられるU・K先生の住所を突き止める。そして彼女がS・Y先生本人であることを確信して、六十年ぶりの手紙をしたためたのであった。それをしおにU・K先生とH・E氏との間に文通が始まり、およよそ一年を経た晩秋の一日、二人は遂に懐かしい念願の再会を果たすことになる。そして彼らはその足で先生の実家である京都・松ヶ崎のY家を訪ねる。ややあつて疎水辺り閑静な住宅街の一角、小



さな表札を掲げた木造の門構えの家の前で、今は年老いて好み姥と爺となつた古の師弟が仲むつまじく寄り添つて、またまそこで遊んでいた近所の少年にカメラのシャッターを押してもらひつ場面が映し出された。

その途端、劇外劇? ならぬ私もまた思わずハッとして身を乗り出し、テレビ画面に食い入つたのであった。

一瞬、何かが脳裡をよぎつた。が、もうひとつはっきりしない。苛立つ氣持と、同時にもつと落ち着きよく考えて想い出さねばどこの氣持が、しばし田まぐるしく交錯した。

わかつた、やつぱりあそじだ、あの家に間違いない。番組の最初から、何か心の隅にわだかまつていたあの感じ、Yと言つ通常はそんなに存在しないむしろどからかと言えは数少なく珍しい部類に属するものの、私には決して初耳ではない、確かに一度はどこかで聞き、はたまた田にした覚えのあるその苗字、おぼろげだった記憶がその時急にまざまざと甦つてきたのである。

話は半世紀以上も前に遡る。昭和三十年春、私は大学付属の結核研究所臨床部門の内科へ同郷の親友H君を誘つて入局した。彼は高等学校時代の同級生だが、大阪大

学医学部出身だった。したがつて大阪から引っ越してき
た彼は、学生時代からずっと京都暮らしだった私と違つ
て、必ず下宿探しから始めねばならなかつた。その通り
私は左京区下鴨の高野橋たもとを川沿いにやや南に下
がつた辺りの玄人下宿屋に寄宿していた。そこで一人は
最初ひと月ほど同室生活をしながら、市内をあちこち下
宿探しに歩き回つていた。

折しも私たちの丁主任教授の内科外来へ通院中の女性患者
にYさんといつ方がおられた。時たま彼女は自家の空き間を
貸すための適当な下宿人を探しておられたが、受診の際に主
治医の丁教授にもその依頼を持ち出されたのはまことに幸運
だつた。教授から紹介されて、新入局医師じ君の下宿はたち
どころに決定した。新米とは言え、主治医の弟子で結核病学
専攻の医師とあれば、Yさんにとっても何かと好都合で心丈
夫だつたと思われる。

更に幸いだつたのは、Y家が私の下宿からそつ遠くない、
歩いてほんの十四、五分くらいの場所にあつたことである。
その辺の地理を勝手知つた私は、早速、彼を案内してY家を
訪問したのは言つまでもない。

実は今、話題に挙げていいY・K先生の兄上がその家の主、
通院なさつていたのはそのじ夫人すなわち先生の義姉に当た
られる方だつたのだが、当時はもちろんそんなことは知る筈

もなかつた。その後何度もY家の友の部屋を訪ね、じ夫人に
会つ機会もあつたとは思つが、なにしろ五十年も前の出来
事ゆえくわしい経過はよく忘れてしまつていて。かくして只
ひとつ覚えていたのは、かのYといつ姓のみの表札を掲げた
木造の門構えだけだつたのである。

突如、テレビ画面に現れたY家の門、以前何度か実際にく
ぐつたことのあるその門を目の当たりにして私は感無量であ
つた。青雲の志を抱いて勉学の道にいそしんでいた若き日々
が、走馬灯の絵のよつて回まぐるしく瞼の裏に行き交つたの
であつた。

さて、そもそもY家の祖先は、奇しくも私の故郷・北陸富
山出身なのである。

この事実を私は十数年ほど前、図書館で偶然に見付けた『越
中百家 上・下巻』(富山新聞社、昭和四九年刊)を読んで
初めて知つた。この本は、富山県の生んだ優れた人材とその
母胎になつた有名家系を選んで一年間連載した新聞の特集記
事をまとめたものであり、その下巻中の五十家の一つにY家
が「学者の系譜・Y家(宇奈月)一族を支える『空華』の
精神」として六ページにわたつて採り上げられていたのであ
る。

以下少し関連資料を併せながら、その記事内容を紹介して
おきたい。

みよ。

Y家は遠く十五世紀末、靈峰北アルプス連山の麓、清流黒部川沿いに位置する富山県下新川郡宇奈月町浦山の浄土真宗西本願寺派白雪山善功寺(せんぎょくじ)の開基である慶祐法師を第一世とする由緒ある学僧の家柄である。

JR富山駅と秘境黒部峡谷の玄関口にある宇奈月温泉駅を結ぶ富山地方鉄道本線の「浦山」駅、その鄙びた山里の小さなトタン屋根平屋建て無人駅舎から歩いてほんの数分、県道十四号・黒部宇奈月線沿いにある当善巧寺境内を入って正面の本堂伽藍に向かつてすぐ左側、壮大な石組の上に「明教院釋僧鎔慶叟」と刻まれた石碑が建っている。かつて全国に門弟三千人を擁した「空華廬」創設者である名僧、第十一世僧鎔の碑である。彼は享保八年、越中国水橋(現・富山市)に生まれ、本名は渡辺与三吉・慶叟。二十一歳で善巧寺へ入寺、やがて上洛、先輩の師僧偏撰へ入門して僧鎔と名乗り、学林(後の龍谷大学)での講義により一段と評価された。宝曆八年ころ自坊に学塾「空華廬」を設立、多くの学僧を育てその生涯に百冊余の書物を著した。安永三年、飛驒の古川で起つた教学上の紛争の説得に努め騒動を不発に導いたが、天明三年、再度の騒動発生に際して本山からの命による派遣の途上で病に倒れ、間もなく入寂した。享年六十一。没後、明教院と贈り名された。

静かに瞑想、思考することを意味する仏教用語「空華」の精神をバックボーンとする学僧の系譜、Y家の第十九世はちようどS・K先生の父君に当たる方で明治十三年生れ。私の母校・県立富山中学校卒業後、一高、東大へ進んだ俊才、四高、六高教授を経て京大文学部教授となつた。京大在任中ドイツのライプチヒ大学に留学、わが国におけるドイツ中世文学研究の先駆的存在。ゲーテ著『詩と眞実』の翻訳者かつ日本ゲーテ協会創立者の一人でもある。昭和十九年、京大退官後帰郷して善功寺住職に就いたが一年後に亡くなった。ところで、S・K先生には三人の兄と一人の姉ならびに一人の妹があり、こ本人は第五子に当たり父親が六高在任中の大正十三年、岡山市で生れている。

先に述べた、つまり私たちが訪ねた折の昭和三十年に京都・松ヶ崎のY家に住まいしておられたのが一番下の三兄、その上の次兄は高校時代の学生運動や太平洋戦争敗戦直前の治安維持法違反で、それぞれ京都や東京の警察署に逮捕留置された体験を持つマルクス経済学者。戦時中は厚生省人口問題研究所に在職、戦後は黒人問題研究専門家の元専修大学教授でずっと東京暮らしだった。父の後を第二十世として継がれたのは長兄である。彼は明治四十四年の生まれ、京大田辺元教授門下のヘーゲル哲学研究者である傍ら、保田與重郎や龜井勝一郎らの文芸雑誌「日本浪漫派」の論客としても知ら

れている。特に福岡高等学校時代以来、檀一雄とは親友でその後の文学活動をともにし、私的交流も続けた。

檀一雄(一)(2)は明治四十五年一月三日、山梨県南都留郡谷村町(現・都留市)生まれ。大正六年父の転任に従つて福岡市へ、次いで大正八年栃木県足利市へ移住する。そのころ母トミが子どもを残して家出離別、大正十三年になって福岡市に住む貿易商の高石勘次郎と再婚する。昭和二年春、檀は足利中学校四年終了をもつて母親が居る地の福岡高等学校文科乙類に入学する。

時あたかも大正十四年三月治安維持法公布施行以来、政府当局の言論思想弾圧は日増しにその度を加速しつつあった。とりあえず檀の高等学校在学時に的をしぼつて、少しその辺りの状況を記してみよ。(3)

昭和三年三月十五日、日本共産党員の全国的な大検挙(三・一五事件)が起る。四月、文部省は学生、生徒の思想匡正を訓令。東大新人会、及び京大、九大、東北大の各社会科学研究会に解散命令を出し、河上肇、大森義太郎、向坂逸郎らの進歩的学者が大学を追われる。六月、治安維持法改悪、死刑・無期刑が追加される。七月、全国警察部に特別高等課新設。司法省、思想係検事設置。十月末、文部省は思想問題対処のため学生課を設置。全国の大学・高専に学生(生徒)主事を配置する。十一月末、小林多喜一が「一九一八年二月十

五日」をナップ(全日本無産者芸術連盟)機関誌「戦旗」に掲載発表。そして翌昭和四年三月には労農党代議士・山本宣治が右翼団体の男に刺殺され、四月十六日には再び共産党員の大規模検束(四・一六事件)が起り、翌昭和五年一月から七月まで続いた全国的な大量検挙逮捕により、遂に日本共産党は壊滅的な打撃を被るに至った。

その年五月には東大の山田盛太郎、平野義太郎、法大の二木清らが共産党シンパ事件で検挙される。八月、新興教育研究所設立。プロレタリア教育運動を推進。昭和六年七月、文部省内に学生思想問題調査委員会設置。十一月にはナップ解散「ツブ(日本プロレタリア文化連盟)」が創立結成される。この間、全国殆どの中高・大学では革新・自由思想・言論弾圧への反対抵抗、自治擁護のための学生運動や同盟休校が澎湃として湧き上がり波及していくのである。

昭和四年十一月末、共済部設置にからむ檀らの福岡高等学校同盟休校事件に相前後して、浦和、松江、姫路、高知、第六、翌昭和五年に入つてからは富山、松山、第三、台北の各高等学校や早大、日本女子大などでやはり次々と同盟休校が発生し、それに伴い多くの学生処分が行われていた。

御多分に洩れず、檀もまた学校当局より社会主義運動の首謀者と看做されて昭和四年に一週間、同五年に一年間の停学処分を食らつてゐる。この第一回の処分を彼とともに受け

たのが同級の親友Yだつたのである。後にYは、二人の処分が放校になつた他の学生に較べるとずいぶん軽かつた理由を、自分の父が当時京大の講師、おまけに檀の父親や叔父もやっぱり教育者だつたためではないかと述べていたとか。昭和七年檀は東大経済学部へ入学するが、本心は親友Yとともに京都へ行き、彼の父が在任中だつた京大文学部独文科へ進学、ドイツへの交換学生留学を希望していたらしい。

東大在学中の昭和九年、檀は古屋綱武・綱正兄弟及びYと四人で、生母高岩トミからも援助を仰ぎながら季刊文芸同人誌『鶴』を創刊したが、たちまち資金繰りに困り第一集をもつて廃刊となる。だがその際、古屋を通じて生涯の友となつた太宰治(4)を知り、たちまちその文才に惚れ込んで彼の作品『葉』を第一集・春号にて、『猿面冠者』を第一集・夏号に収載することになる。Yは創刊号に評論『作家精神の一つの面』と文学時評『志賀氏の「日曜日」評』を投稿している。その年末、檀はまたもやYや太宰治、山岸外史、中原中也、今官一、森敷らと一緒に文芸誌『青い花』を発刊、太宰治の『ロマネスク』やYの『ナポレオンとラスコリニコフ』などを載せた創刊号のみで休刊。間もなく廃刊に追い込まれて、太宰、山岸や檀、Yたち同人の一部は、昭和十年五月からの「日本浪漫派」第一巻、第二号へと合流することになる。Yは合流直後の五月号に『なまけものの感想』を、翌十一年一

月発行の第一巻、第一号へは『浪漫的精神』を寄稿している。なおYと太宰治の最初の出会いは、昭和十年京大文学部哲学科卒業後、檀と連れ立つて東京世田谷の経堂病院へ虫垂切除術後に併発した腹膜炎と肺結核で入院加療中だつた彼を見舞つた時だつたといつ。

その後Yは立命館大学教授に就任、哲学を講じながら京都暮らしが続いたが、戦後の昭和二十一年父の死去で帰郷して善功寺を継ぐことになった。傍ら富山県教育委員長を務め、はたまた富山大学講師としてドイツ語の教鞭を執り、富山女子短期大学で哲学を講じたりもした。

檀との交流はその後も続いた。昭和二十三年に善功寺を訪れた彼は一ヶ月間滞在して『佐久の夕映』を執筆し、あるいは近くの富山県朝日町で発生した事件に取材、ヒントを得た短篇『尼僧殺し』を発表、更に昭和三十五年に再訪した折には、檀流クッキングの腕前を披露しながらの料理講習会を開いたりもしている。

さて無頼派作家檀一雄と言えば、絶筆となつた小説『火宅の人』がすぐ頭に浮かんでくる。彼の没後十年に当たる昭和六十一年、この作品は東映映画会社の高岩淡企画、深作欣一監督によつて映画化され、檀の長女ふみも、平成二十年秋に亡くなつた名優・緒方拳扮する桂一雄(檀一雄がモーテル)の母親役として好演している。

檀ふみが女優となつたきつかけには(2)、(1)の映画の企画者である高岩淡一(現・東映会長)が大きく影響してゐる。

昭和四十五年、大阪・千里で開催された「日本万国博覧会」を見物しての帰途、彼女は祖母トミの息子である高岩淡(父一雄の異父弟)が、当時、所長をしていた京都太秦の東映京都撮影所を訪れた。その際、ふみの姿姿が某プロデューサーの目にとまり、女優としてのスカウト(懇意)がその一年後正式に、所長を通して父親の檀一雄へもたらされたのだった。昭和四十七年、彼女は高倉健主演「昭和残侠伝」(破れ傘)でデビュー、以後映画スターへの道を華々しく駆進し、「テレビや芸能マスコミの世界で一躍売れっ子になってゆくのである。

この高岩淡は京都撮影所時代、嵐山の近くに住んでいた。

京都市右京区嵯峨北堀町にあつた日本住宅公団・京都嵯峨住宅の一角である。もともと此処は、日本のハリウッドと呼ばれた映画製作のメッカ・太秦に近かつたので、若手のシナリオ・ライター・やカメラマンから助監督クラスの映画人たちが多数住んでいた。

たまたま私も空き家抽選に運良く当たつた結果、昭和二十六年から同四十二年まで当団地に入居していたのである。思えばあの頃はまだ電話の普及率が極めて低く、各戸に一台などはまさに夢のよつな話、とてもそんな贅沢は考えられない貧しい時代だった。もちろん我が家にも電話はなく、

その節団地の世話役で事務連絡所を兼ねておられた高岩家の電話を緊急呼び出し用にお願いしていた。昭和三十七年暮れ、つすら寒い小雪の舞う夕方に故郷から突然の長距離電話で、父親が死の病いに斃れたという悲しい知らせを聞いたのも高岩家の玄関先だった。その黒く硬い冷たかつた受話器の手触りだけは未だに決して忘れることが出来ない。

「高岩の企画」制作あるいは総指揮になる東映映画には「野菊の墓」(伊藤左千夫原作、昭和五十六年)や「わが愛の譜 瀧廉太郎物語」(郷原宏原作、平成五年)、「鉄道員」(浅田次郎原作、平成十一年)、「長崎ぶらぶら節」(なかにし礼原作、平成十一年)などの文芸もの、殊に敗戦時・熊本幼年学校一年生だった彼の鎮魂の思いと非戦の願いが筆められた「きけねだつみの声」「再映画化版」(平成七年)、「ホタル」(平成十三年)、そして最新作「男たちの大和」(平成十七年)の戦争三部作、他数々の大作がある。

ここではその中の一つ、やはり日本アカデミー賞助演女優賞に見事輝いた檀ふみが出演している「わが愛の譜 瀧廉太郎物語」(澤井信一郎監督)についてちよつと触れてみたい。風間トオル演じる瀧廉太郎の学ぶ東京音楽学校教授で第一回欧洲音楽留学生の幸田延(文豪幸田露伴の妹)役に檀ふみが登場、彼女の妹(映画では姪の中野ユキになつてゐる)幸が第一回留学生、第二回留学生の廉太郎は宿洞の肺結核再燃によ

り志半ばで帰国、恋人の幸に捧げる曲「憾(つらみ)」を遺したまま「十三歳で夭折する」という内容の音楽映画である。

チャイコフスキーやショパンの名ピアノ協奏曲第一番、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」、ピアノ奏鳴曲第二十三番「熱情」、アバツィヨナータやシユーマン、リスト他のピアノの名曲がふんだんに挿入され、ドイツロケの美しい風景と相俟つて香り豊かな佳品に仕上がりっこ。

ところが、この瀧廉太郎(5)(6)、若き日の一時期を富山で暮らしている。彼の父・瀧吉弘が明治十九年八月、富山県書記官として赴任、一家は富山市千石町の官舎に移住する。七歳の廉太郎は同年九月、旧富山城内にあつた富山県尋常師範学校付属小学校第一学年へ一学期から転入。明治二十一年四月に父の退職で上京、四月に東京市麹町尋常高等小学校第一学年へ転入学、五月に第二学年へ進級するまでの一学年八ヶ月を富山で過ごしている。

後に彼が作曲した組曲「四季」中の「花」「月」「や」「雪」「雪やこんこん」「お正月」「雁」などの詩情あふれるモチーフには、かつて廉太郎少年の目に焼き付き心に深く刻み込まれていた富山の鄙びた自然の風物詩も大いに関与していたのでは?と思われ、また東くめ作詞になる「納涼」の「ありそ海」なる詞も万葉歌に歌われ越中の歌枕でもある「荒磯」に何か関連しているのかも知れない。

加えて土井晩翠作詞・瀧廉太郎作曲「荒城の月」の城郭のイメージに、土井は仙台の青葉城や会津若松の鶴城を観たらしいが、瀧は更にそれへ父の転任先であつた富山城、大分の府内城、竹田の岡城や東京の江戸城などを重ね合わせ、特に幼き口に通つた小学校がその敷地内に建ち、かつ生まれて初めて見る城郭であつた富山城(江戸期、外様大名の雄・加賀百万石前田家の支藩、十万石富山藩主居城)がとりわけ強い印象をうけたのではないか?とも思えてならないのである。

話が大分横道にそれたので、ここでドラマ中に語られた先の平成十五年夏再放映のNHKテレビ番組「私の太平洋戦争昭和万葉集から」の由来本筋へ戻り、その要点を述べることにする。

昭和五十四年二月、講談社創立七十周年記念事業出版『昭和万葉集全二十巻・別巻』の刊行が、第一回配本「巻六 太平洋戦争の記録」(昭和十六年~二十年)をもつて開始された。

直後から、NHKはこの歌集に寄せられた多くの短歌の作者や親族を訪ね歩いて、それぞれの歌に秘められた三十餘年來の思いを掘り起こし、改めて激動の時代を生き死にした人々の嘆き、悲しみ、痛み、怒り、叫びを画像に表現、集録

したのである。

H・E氏がDVD録画していた同一同時刻、私もまたこの番組をビデオテープに撮りながら視聴していた。

約一時間近く続く画面に次々現れる短歌の詠み手・作者には、土岐善脣、湯川秀樹、徳川無声、野間宏や杉本苑子など少数の有名人もいるものの、殆ど多くは名もない一般庶民の方たちばかりである。

戦地へ赴いた親兄弟あるいは夫の身の上を思ひ子や妻の歌、戦場における下級兵士が故郷に残した肉親や負傷した戦友を案する歌、女や子供、年寄りたちが銃後の耐え生活の苦境を乗り越え、励まし命つ歌、そして被爆被災の残酷悲惨さを只じひと見つめ、耐え忍ぶ無念嘆哭の歌等々が、時に「愛国行進曲」や童謡唱歌「お山の杉の子」そして戦時中のラジオ番組「前線へ送る夕」の主題前奏曲であった「ハイケンスのセレナーテ」などをバック・ミュー・ジックにしながら紹介されるのである。

S・K先生の短歌が出てくるのは、番組が始まつて約四十分過ぎの辺りである。奈良岡と組んだ男性ナレーター・宇野重吉の問いかけに、彼女はややはにかみながら「上空を飛び過ぎて行く夫の飛行機の中に包まれたその瞬間、ほんの一瞬だつたけれども壊しかつた」と語り、次いですぐさまその一式陸上攻撃機(7)の型と大きさをすらすら答えてい

る。

「巻六」の一〇六ページ 戦場への思い 夫を思ひに

先の短歌に加えて

全長25全幅20高さ5と

わがそらとじし君が機の型

眼路のかぎり生きの命のかぎりかと

爪立ちあぶぐきみが機影を

君が機の海と空とにまぎれ入り

われはうつづけて砂の上にあり

の二首が挙げられている。

じじゆで、続くそのすぐ後の画面に現れる被爆者豊田清史「こそは、私が夙に知遇を得、尊敬して已まない広島の反戦歌」人なのである。

アーヴィクレマセンカア咽ノド

痛イイ夜ガ明ケンノウ

「巻七」の《敗戦前夜広島》に採録された彼の絶叫が、テロップ文字で画面上を横に流れるとともに、原爆の悲惨さを訴え核廃絶を願う豊田の真摯な顔がクローズアップさ

れる。

昭和二十一年八月六日朝、広島師範学校付属国民学校教師だった二十四歳の彼は広島駅東方、爆心より一・七キロメートルの地点で被爆する。幸いにも足の負傷のみで生命は助かつ



のよつた一節を挿入しているのが想い出される。

なお吉田満の痛恨の著書『戦艦大和ノ最期』も、やはり全文片仮名書きである。

いつたい人は生死の関頭に立ち、ぎりぎりの切迫緊張した状況に至ると自然本能的に、よりリズミカルで簡潔直截的な片仮名表現を用いるよつになるのだろうか。

彼は、その画面で「仮名で書く方がより事実に近い」と語っているが、作家原民喜もまた仮名で『原爆被災時のノート』を綴り、作品『夏の花』中に廃墟と化した市内の様相を「二の辺の印象はどうも片仮名で書きなぐる方が心しいようだ」とて

ヒロピロトシタ パノラマノヨウニ

アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノ

キミヨウナリズム スベテアツタコトカ アリエタコ

トナノカ パツト剥ギトツテシマツタ アトノセカイ

テンブクシタ電車ノワキノ 馬ノ胴ナンカノ フクラ

ミカタハ ブスブストケムル電線ノニオイ

一時、梶山季之らと「広島文学」を編集し、同人事務局長

ギラギラノ破片ヤ 灰白色ノ燃工ガラガ

にも収まつた。現在、短歌と評論誌「火幻」を主宰、多くの歌集や文学評論・学術書を著している。
この『昭和万葉集』には、他にも彼の短歌が多数採録されているが、とりあえず「卷十」の『死の灰の恐怖「広島」より』の一首

仰向けに陽に並べられた少年の

眼つむり絶えて陰みな黒き

「過ちは繰返しませぬ」と誰にいふ

屍の上を重靴踏みゆくに

と「卷十五」『戦争の傷痕 原爆の傷痕』の

わが内耳溶かさん夜々の響きをも

「」のじづめ聴く冬弥撒の鐘

の一首の計二首を掲げておく。

そして更に「せひとも記しておかねばならぬ」とは、井伏鱒一著『黒い雨』の種本となつた「重松静馬日記」に関わる一件である。井伏の作品は、豊田が淨書させ送られた親友重松静馬の日記他を基にして出来上がつたものである。

殆ど七割強の日記原文をそのまま無断で流用、剽窃、盗作したといつ事實を告発して、執拗に文壇の大家や取り巻きの

売れっ子評論家たちと出版企業界に瀕むどす黒い霧に立ち向かい、孤軍奮闘し続けているのもまた他ならぬ彼自身なのである。まことに反権力の熱血正義漢、豊田の面目躍如たるものを感じざるを得ない。

私の連想の余波はまだまだ續く。

卒業後のS・Y先生は、やがて結婚されるまでの二ヶ月間を母校の京都府立第一女学校に在職された。わが国で最初に創立された自由主義の気風と伝統にあふれる女学校である。

戦後、学制改革で男女共学のO高等学校へ生まれ変わったこの学校に勤めておられたH先生は、偶然にも私の中学校時代のクラス担任の恩師だった。

同志社大学を出られた先生は、暫時、府下の某女学校で勤めた後に、遙々、北陸富山の中学校へ赴任された。悪餓鬼どもだつた我々にせがまれて、よく「同志社カレッジ・ソンング」を英語で歌つてくださつたことが懐かしく想い出される。ただ戦時下、英語教師だったがために大層肩身の狭い思いをされ、配属将校らからも白い眼で見られていたらしい噂もたびたび耳にした。敗戦直前に帰洛され、やはりY家のある松ヶ崎の地内に住んでおられた。

五年後、京都に学ぶことになつた私は、はしなくも先生と再会の機会を得た。遊びに行くところも北の雪国時代の話に

楽しい花が咲く一方また、教職員組合の副委員長としても活躍させていた先生からは何かと社会主義的と思はる常識を教えられて、しばしば己の政治言論を思い知らされたものだった。

やはり当時、府会の革新代議士としてふる眞懇だった研究所時代のA助教授の住まいもすぐ側だった。動物実験や論文作成に際しては直接指導を戴いたが、敬虔なクリスチヤン

だった彼は、正月元旦はあるかクリスマスの日も必ず研究室へ出勤、仕事を休まるのを殆んど見たことがなかつた。

いつかクリスマス・イブの夜遅く、相変わらず研究室の灯が点いていたので、ちよつと覗いて、「先生、今夜はお帰りにならなくともいいんですか?」と言つたら、「私は、今朝もう礼拝をすませてきましたよ。イブだからと言つて、何も町をうろついてお酒など飲まなくてもね……、まだ仕事が一杯たまっているしね……」と答えながら、悠然と本を読んでおられた姿が、今もつて鮮やかに瞼に焼きついている。

更に懐かしい想い出が甦つてくる。

小、中、高等学校、そして学部こそ違つものの大学もまた一緒だつた畏友F君がいた市電系統・東山線高木町電停傍ら、松ヶ崎近辺の下宿二階へもよく遊びに行つた。政治、経

済・社会、思想、文学・芸術、学生運動等々、夜を徹してのかまびすしい論争で、私はいつも彼の理路整然たる鋭い舌鋒の軍門に降らざるを得なかつた。法学部を終え、やがて青年法律家協会所属の判事となつた彼は、札幌地方裁判所在住時の昭和四十八年九月「自衛隊のナイキ・ハイキューーズ基地建設は憲法違反」と言つあの長沼訴訟判決で、一躍勇名を轟かせて時の人となり私たちを驚かせたものだった。(8)

そう言えば、阪波映画時代の昭和三十九年、先年亡くなつた反戦と自由の士・黒木和雄監督の名篇ドキュメンタリー・モノクロ映画「とべない沈黙」(100分)日映新社制作、ATG公開、昭和四十一年(9)(10)に参画して、松川八洲雄と組んで脚本を担当し、助監督を務めたのも他ならぬ彼と同じ「青の会」メンバーだったH・E氏である。

北海道には決して棲息しないナガサキアゲハ蝶を必死になつて捕らえ学校へ持参した少年は、先生たちから実はどこかで買ったかあるいは盗んできたものではないか?と怪しまれて煩悶する。一転した画面で、ザボンの葉に止まつたナガサキアゲハの幼虫が、長崎から汽車に乗つて運ばれ秋、広島・京都・大阪そして、突如長驅して香港へ、再び横浜・東京へ戻つて、空路遂に千歳へ到着する。その列島縦断の旅路にあつて、加賀まり子扮する美しいアゲハ蝶の妖精化身は、

敗戦後日本の政治経済状況における幾多の繁栄と低迷、度重なる革新運動の昂揚と挫折を遍歴体験し、堕落俗塵に押し流される頽靡風潮や泰平ムードに遭遇する。

世のいわゆる正論と称するものと曰ひの関わつてゐる現実との角逐葛藤の数々、知性と心情の交錯と離反や齟齬軋轢、孤独な魂の沈黙の漂泊を描いたこの現代文明と社会世相批判のオムニバス的ストーリーは、（突如、国會議事堂内衆議院での強行採決時の議長席を取り囲む与野党掴み合い模様のニュース画像や、東京湾内を進む原子力潜水艦、都内における自衛隊の戦車隊列行進の映像なども挿入されていて）かなり観念的で難解である。

だが戦後の一時期、日本が掲げた民主主義と文化平和国家への強烈鮮明な希求、願望が、ともすれば單なるノスタルジアと幻想の彼方へと遷り、かつ没落してゆく心象風景だけは、（例えば、冒頭、北海道の明るく輝く広々とした原野に舞い飛び綺麗なアゲハ蝶を懸命に追い掛け続け、次いでその蝶の生態に関する真偽と夢想・希望の狭間に苦悩する少年の大写しの顔と姿を持ち前の記録映画独特の手法を存分に駆使して描く見事な詩的シーンなどのカメラワークに照らしても）、結構、映し出すことに成功しているのはなかろうか。

（）の映画を作ったモチベーションには、當時の政治状況にたいする私なりの危機感がありました。（中略）憲

法九条で「戦争放棄」したにもかかわらず、国民の知らないところで有事立法の策定が検討されていたことに、私はふたたび、「いつか来た道」を歩むのではないか、戦後民主主義が否定されることへの不安がありました。自衛隊の戦車が出動して東京が戒厳令下に置かれていた状況を描いたのも、こうした「明日」への強い危機感があつたからで、モチーフに重ね合わせて描いたのです。

と、後に黒木もまた時代逆行への無気味な予感を語つてゐるのである。

加えてH・E氏には、反戦自衛官小西誠二等陸曹の裁判闘争に資料を得た意欲作映画「叛軍NO・4」（九八分、一六三リフィルム、昭和四十七年）があることも記憶に留めておきたい。

平成十七年五月、冒頭に記したNHKテレビドラマのいきさつが、その後先生の手元に保存されていた「教生期」ノートから的一部抜粋をも併載して、H・E氏の共著『あの夏、少年はいた』（れんが書房新社）として一冊に編まれ刊行された。

二人の間に交わされた往復書簡や日記の文面からば、昭和十九年初夏、戦争の雲行きもよつやく急を告げサイパン島が陥落し東條内閣は総辞職した頃にもかかわらず、そんな時代

の暗さを一気に吹き飛ばすような師弟の間に萌え立ち輝く青春の息吹が感じられ、半世紀以上に及ぶ互いの波乱に富んだ人生の年月を超えてなお、鮮烈に響き合つ想いのだけがまさ

まざと読み取られて痛く胸を打つ。

本ドラマを観賞し著書を紐解いた私もまた、同じ激動の昭和年代を生き抜いてきた者の一人として、深い感慨を覚えざるを得ない。Y家を発端として故郷富山、結核研究、戦争、そしてライフワークの作家太宰や檀など、いさかか連想ゲーム的な発想をもつてわが来し方の心に浮かぶ由なしことを綴つてみた次第である。

S・K先生、H・E氏、お一人の幸せなご邂逅を心よりお慶びし、末長い健勝を祈つて止まない。

〔付記〕

実は本稿に関して、最初、かなり似通つた私自身のまさしく六十年の星霜を越し、北陸隣県K市のA川畔にまつわる或る貴重な昔沙汰から奇しくも甦つた旧い高等学校時代の体験事実をも又書き添えるつもりだったが、結局、割愛し別の機会に譲ることにした。

かつて若き青春の口における、今尚瞼の裏に搖曳する緋色の口傘の君、懐かしくもほる苦い想い出は、やはりただ独りわが心の奥底深く遙かモラトリアムの彼方へ、いついつまで

も美しくかぐわしい夢のままにそつと閉まつて置きたいよつな気もするので……。

なお、本文中に引用した著書以外に次の諸資料をも参考した。

- (1)『檀一雄全集』(沖積舎、昭61・1)
- (2)野原一夫『人間檀一雄』(新潮社、昭61・1)
- (3)旧制富山高等学校思想文化運動史編集委員会編『旧制富山高等学校思想文化運動史』(新興出版社、昭56・10)
- (4)『第十次太宰治全集全十一巻・別巻一巻』(筑摩書房、平元・6~平4・4)
- (5)海老沢敏、瀧廉太郎『夭折の響き』(岩波書店、平16・11)
- (6)山田野理夫『荒城の日』(恒文社、昭62・5)
- (7)雑誌「丸」編集部編『銀河ノ一式陸攻』(光人社、平12・11)
- (8)福島重雄他『長沼事件平賀書簡 35年田の証言』(日本評論社、平21・4)
- (9)佐藤忠男『黒木和雄とその時代』(現代書館、平18・8)
- (10)ATG Film Exhibition NO.3『とべない沈黙』(京都芸術劇場・春秋座・京都造形芸術大学内)、平20・6)